

Miracles

New Creation Church Weekly Report since 1997

ἐκκλησία

2007年9月16日 No.544

50周年記念誌その2

主任牧師 藤林いざや

先週に引き続き、記念誌について。

今回、兄姉のお証にも全て目を通させて頂きました。真実な証が数多く与えられて、本当に感激でした。なかでも、40年を超える人生を、教会と共に歩んでこられた兄姉の証は、宝玉のような輝きを持っていました。

また、同時に近年家族に加えられた兄姉の証も、瑞々しい勢いと命に溢れるものでした。やはり、このような年月の厚みというものは、愚直に主の前で歩んできた命の結晶だなと感激した次第です。

今回は、歴史を辿る意味で、大凡6つの時代に分けました。

リバイバル渴望期は、京都福音教会のリバイバルと呼ばれる直前の時期です。1957年に開拓が始まり、数年間、胎動と呼ぶに相応しい時期がありました。特に、藤林コト師との出会いから、藤林コト師が渡米された後、アメリカの様子を聞きながらリバイバル集会を重ねていく時期は、藤林邦夫師にとりまして、極めて期待感が溢れる時期です。そして、第1期に献身して行かれる方々は、この時期のことを昨日の出来事のように、熱く語って下さっています。

第二は、**百の教会、百の牧師・宣教師**というヴィジョンを打ち出した時期です。この中で、献身した方々が、現在の日本福音ペンテコステ教団にも数多く残っておられます。そして、お証もそういう面々のリアリティ溢れる内

容です。よほど熱かったのだな、と思わずには居られません。献身して牧師になることは『男の花道』なんですから。

第三は、**揺りかごから天国まで**、の時期です。ここが京都福音教会の充実期と言いましょか。教会の規模も100名前後であったのが、一気に200名を超える水準まで成長していきます。但し、この人数の増加には、クリスチャン・ジュニアの誕生が大きく寄与していたことは忘れてはなりません。一時期、200名余りの礼拝で、70名ほどがジュニアだったという時期もあるほどです。惜しむらくは、ジュニアをどのように方向付けるかに、余り上手では無かったことです。かなりの人を、教会から離れさせてしまいました。

第四は、**千人教会を目指して**、という時期です。一つのピークが1980年から1981年の時期でした。ここで、クリスマス祝会には、550名の出席を記録しています。千本七本松にあるセンターで行ったもので、おびただしい人だった記憶があります。ただ、その後、大倉昭元牧師が大阪へ、岩城康人副牧師が京都で開拓に出られましたし、伝道師をなさっていた方々も、何名かおられなくなってしまった時期でもありました。でも、兄弟の直向きな献身の中で、本部教会の礼拝堂が建立されたのです。PAを入れる時も、かなり建築委員会ですったもんだがありました。将来の為にということで何とかねじ込んだのです。

第五は、**創立者の召天とその後**です。ここは、藤林コト師の率直な思いが述べられています。ストレートですから、ちょっと驚かれる方もおられるかも知れませんが、でも、キチンと記録することは大事なことです。

最後は、**二艘の船**です。ここは本部と京都中央チャペルが別れてから以後のことが述べられています。小平師も相当のご苦勞をなさったのだな、ということがよく分かります。また、どこの馬の骨と見られていたことに、反発しながらも、一心に牧会して来られたことが伝わります。小平師にとりまして、特にこの50周年は檣舞台になることでしょう。

それぞれの時代を年譜に纏めていますので、そちらと照らし合わせながら読まれると、一際味わい深いものになると思います。どうぞ期待！ですね。

